



岩手県における学校防災の取組

森本 晋也

岩手県教育委員会事務局 学校教育室指導主事

- I 震災前の取組から～釜石東中学校を事例に～
- II 震災後の取組から
～「いわての復興教育」の取組を事例に～

はじめにー自然の二面性と人々の知恵・文化ー

豊かな自然の恵み・文化



三陸海岸(リアス海岸)



養殖ワカメ(日本一の生産量)



伝統芸能・文化
(虎舞・スネカ)



北限の海女



サケの郷土料理



カキの養殖

「岩手県HP・資料」より

時に人々を襲う災害



東日本大震災津波(2011年3月)



岩手宮城内陸地震(2008年6月)
「内閣府HP」より



大雨による土砂災害【金沢市】
(2002年7月)



大雨による土砂災害【栗石町】
(2013年8月)

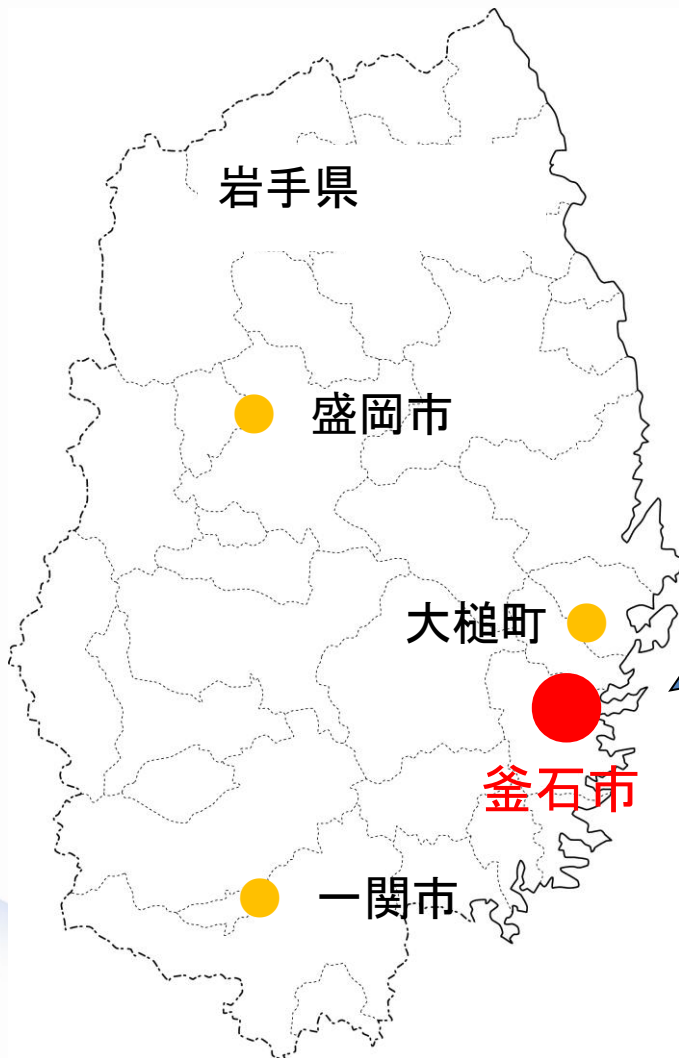
自然と共存する人々の知恵・文化

はじめに一釜石市における防災教育のねらいー

- 1 『自分の命は自分で守ることのできる
チカラ』を身に付ける。
- 2 『釜石に住むことは津波に備えるのは
当たり前』文化の育成
- 3 『津波はたまに来るけど、釜石はこれほ
どまでに魅力的な郷土である。』

「釜石市津波防災教育のための手引き」(H22)より

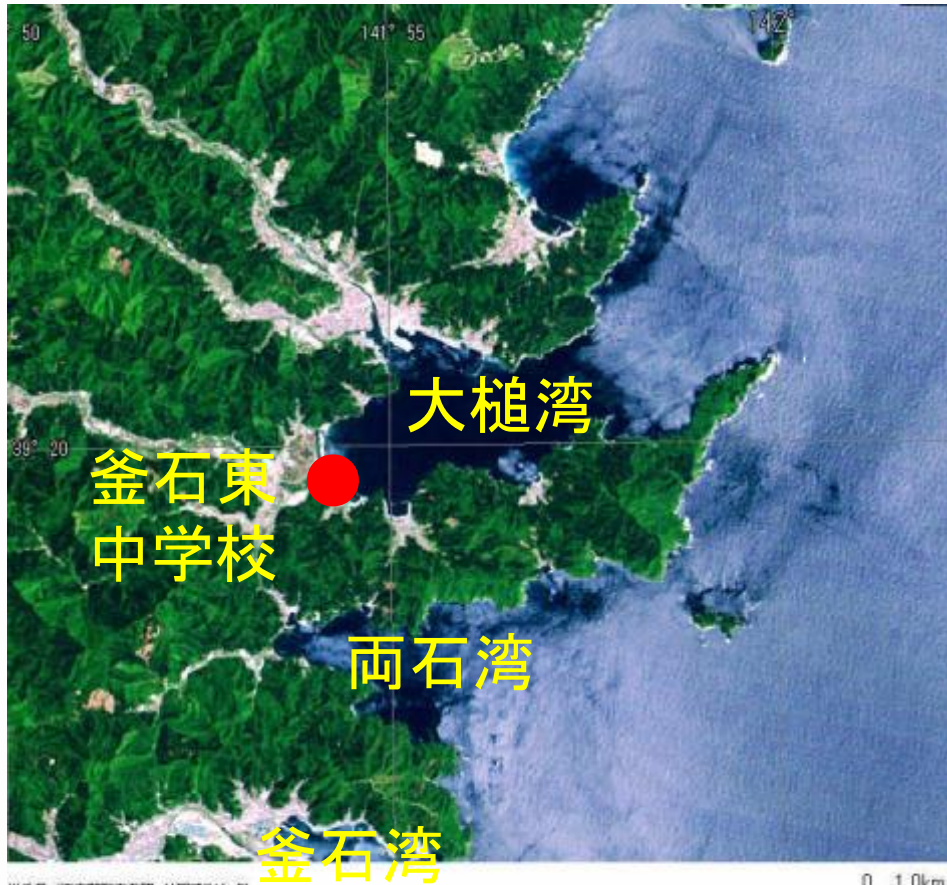
I 震災前の取組～釜石東中学校を事例に～



震災前の釜石東中学校

根浜海岸のすぐ近くにある
鵜住居小学校が隣接

釜石東中学校の位置と津波被害の歴史



岩手県／宇宙開発事業団 共同プロジェクト
衛星データ所有：米国防府
衛星データ提供：Space Imaging (IR) ／ 宇宙開発事業団



11月5日は
津波防災の日

津波が押し寄せる釜石市鵜住居地区

釜石東中

鵜住居小



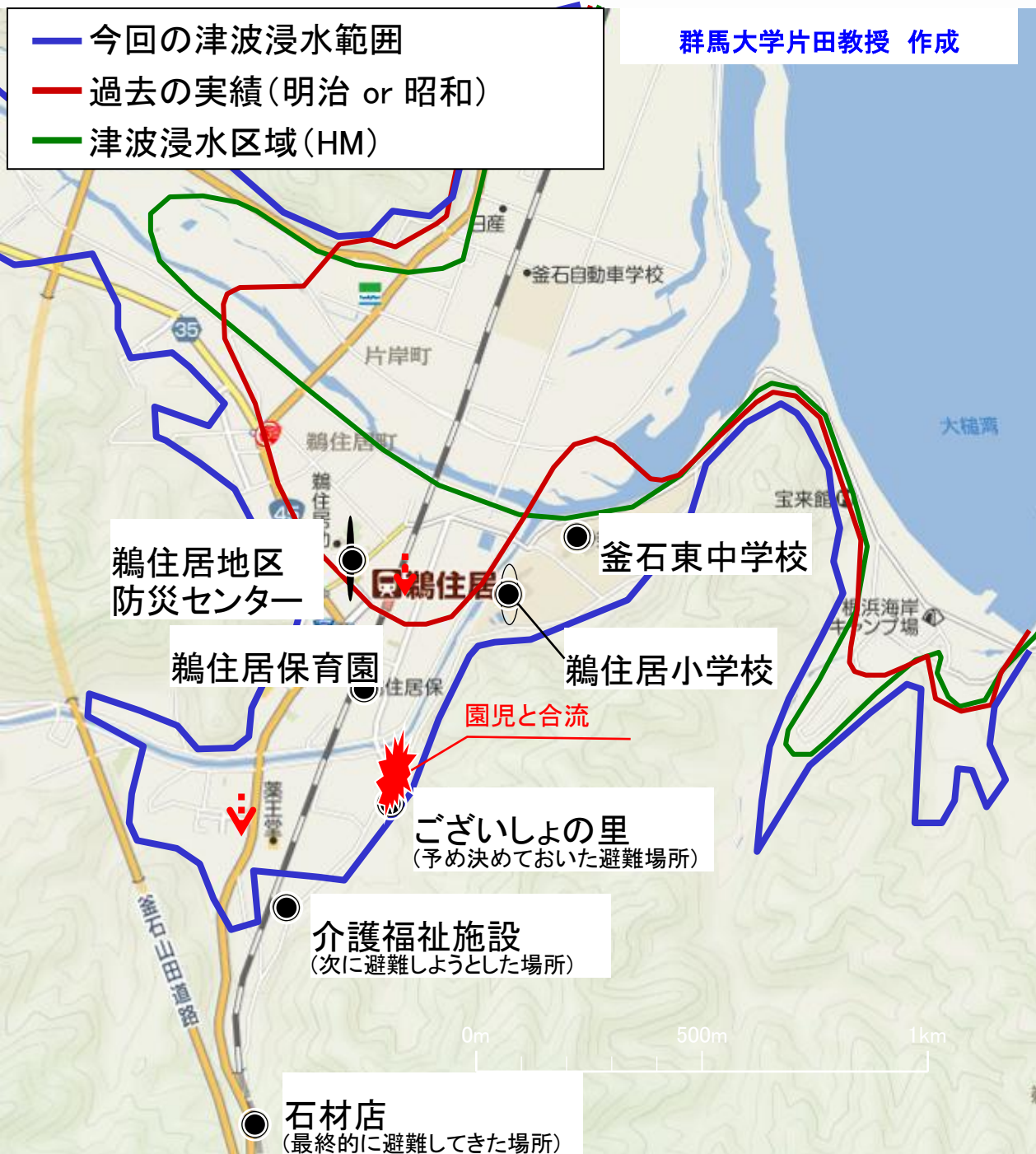
震災直後の鵜住居地区

鵜住居小学校
3階に突き刺さる車



- 今回の津波浸水範囲
- 過去の実績(明治 or 昭和)
- 津波浸水区域(HM)

群馬大学片田教授 作成



第一避難場所から第二避難場所に逃げる児童生徒



写真撮影 地域の住民の方(高村氏)

第二避難場所からさら高台へ



写真撮影 地域の住民の方(浦山氏)

釜石市防災教育研修会（2006年2月）

- ① 河東眞澄元教育長のことば
「子どもの被害をゼロにする」
- ② 片田先生の講演内容
 - 児童生徒、保護者、教師の意識
 - 津波常襲地域
 - 人々が逃げない心理—正常化の偏見—
- ③ 津波避難指示—避難率の低さ—

必要感

11月5日は
津波防災の日

I 震災前の取組～釜石東中学校での取組～

【2006年度】1年生 総合「てんでっこ」～地域から学ぶ津波の歴史と防災～



昭和8年の体験談を聞きとり

オリエンテーション
「津波と私達の暮らし」

「フィールドワーク」
史跡、体験談、被害の様子、防災対策を調査

11月5日は
津波防災の日

構成劇「てんでっこ」

明治の記録や昭和8年の津波体験談をもとに劇化。「てんでんこ」の教えをテーマに発表。学習して感じたことをみんなで詩にして、朗読する。

文化祭の展示館

調べてきたことを展示。レポート集、記念碑の模型、両石地区の被災状況を作成。



学習したことを文化祭、地域の公民館、市民文化会館で発表 **地域への発信**

釜石東中学校の全校での防災教育の取組

【防災教育のねらい】(2009年度)

1. 自分の命を自分で守る

～津波・地震の知識を身につけ、避難できる生徒の育成～

2. 助けられる人から助ける人へ

～家族・地域社会の一員としての自覚を高め、行動できる生徒の育成～

3. 防災文化の継承

～防災文化の継承者の育成～

【ねらいを達成するために】

1. 津波を知る、避難方法を知る、地域を知る。(知識・理解)
2. 日常生活においても、考え、判断する。(思考・判断)
3. 避難訓練や防災ボランティアストにおいて実践する。(行動)

釜石東中学校 防災教育プログラム

「EAST-レスキュー」

	1年生	2年生	3年生
共通	防災オリエンテーション、小・中合同避難訓練、小・中合同地区集会、防災ボランティアスト、地域の避難訓練		
教科	ゆれる大地(理科) 耐震技術(技術) 地域調査(社会) 防災ポスター(美術) 他	自然災害(社会) 災害に備える(保健) 安全対策(家庭) 防災ポスター(美術) 他	地域での支え合い(社会) 防災ポスター(美術) 他
総合	「てんでんこ」 (体感学習、フィールドワーク、ビデオ制作、率先避難)	「Tsunami」 (津波防災館訪問、防災ボランティアストの劇化)	本所防災館訪問 (修学旅行において学習)
道徳学活	「災害ボランティア」(道)	「避難しない人の心理」(学)	「語り伝えよ」(道)

11月5日は
津波防災の日

全校総合

防災オリエンテーション学習



全校防災学習のねらいを確認

「EAST-レスキュー」

East: 東中生 Assist: 手助け

Study: 学習する Tsunami: 津波

○防災に関する知識

- ・地域の津波被害の歴史
- ・津波発生メカニズムとその被害
- ・避難行動の知識・判断
- ・地域の言い伝えなど

○1年間の学習への動機付け

特別活動
(学校行事)

小・中合同避難訓練(5月)



・小・中連携、地域との連携への一歩へ

小・中合同地区集会(7月)



もし、津波から逃げなければなら
ないとき、どこに避難すればよいか、分
かりますか？

- ・お互いに自己紹介をしましょう。
- ・地域の危険なところを確認しましょう。



- ・小学生と中学生が顔見知りになる。
- ・地域での生活において中学生に責任を持たせる。

道徳「災害ボランティア」



自分たちにできることは、
何だろうか？

避難する時や避難した後は、どんなボ
ランティアができればだろうか？



・地域社会の一員としての自覚を持たせる。

「防災ボランティアスト」 安否札・チラシ配り、防災マップづくり

手作りの安否札・防災チラシの配布



全校生徒、縦割り班で
20のグループに分かれて活動



防災マップづくり

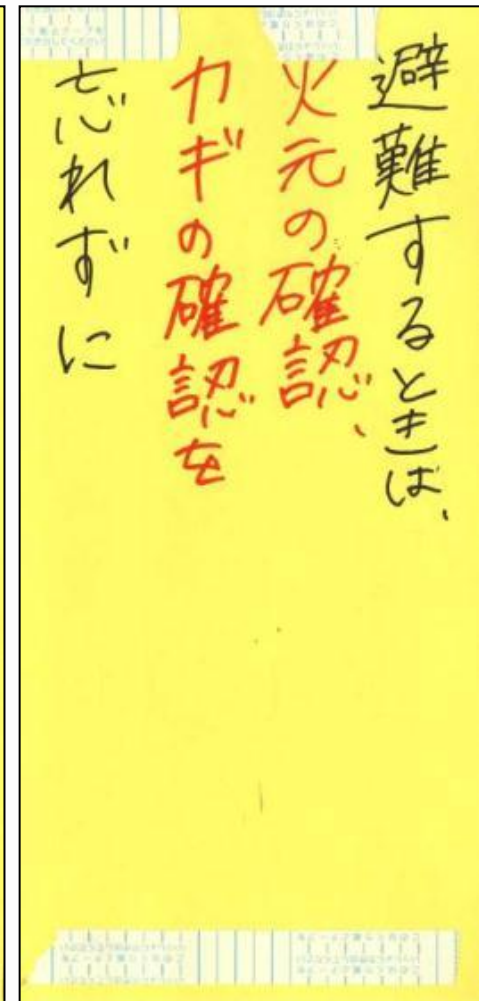
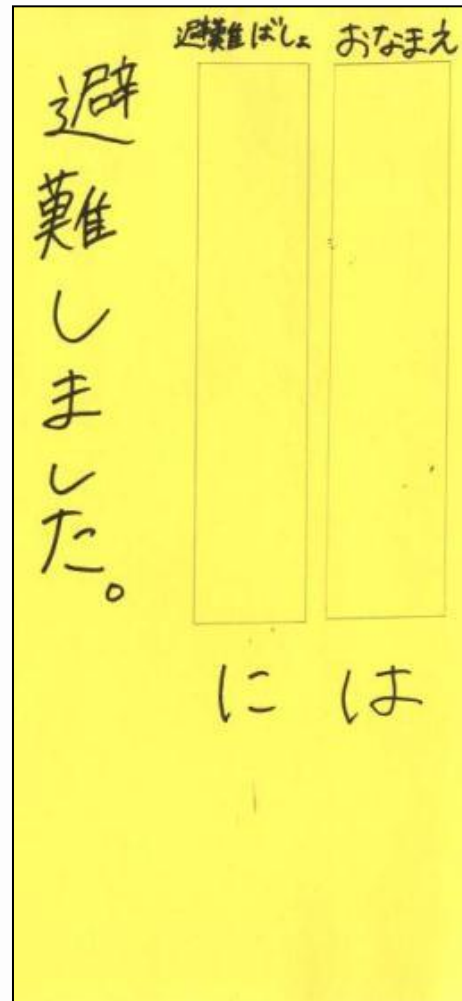


11月5日は
津波防災の日

安否札の配付



一人暮らしの高齢者のお宅を中心に、民生委員さんの協力を得て、配付した。



生徒の手書き

左(表)／右(裏)

11月5日は
津波防災の日

防火訓練,救急搬送,水上救助,応急処置



11月5日は
津波防災の日

両石・片岸地区での学習(自主防災組織) 災害時の炊き出し訓練、防災頭巾づくり



生徒の感想



○地震が起こった後、15分ぐらいで津波が来るかもしれないので、自分たちがしっかりと避難場所を把握して、逃げる手助けをしたい。

○いつ起きるか分らない災害が、もし起きたときに、ケガをしている人たちを率先して手助けしたい。

○臨機応変に対応し、自ら進んで、そこらにあるものを使い、処置したい。

○自ら進んで地域への活動をしたい。もしもの時、お年寄りの家に行きたい。

○実際水の中で人を助けることは、楽勝だと思っていたけど、今日やってみてすごく難しかった。・・・あわてないで、習ったことを自分でできる範囲で助けたい。

○災害にあった人の精神状態は不安定になるので、あたたかい声をかけてあげて、助けられる側から助ける側になりたい。

○津波がここまで来たのかと思った。本当に来たらのみこまれてしまうと思った。大人がいなくても自分たちで担架をつくり、ケガした人を運べるようにしたい。

○ここは、災害が起こりやすいことを学習した。なのにお年寄りの方が多いので、災害が起こったら大変なことになると思った。災害発生時には、自ら進んで地域への活動をしたい。

11月5日は
津波防災の日

避難時に実際に使われた安否札



避難時に実際に使われた安否札

【ねらい】

1. 津波について、**体感**する。
2. 地域を**自分たちの足**で歩き、津波の歴史や体験談から、防災について学ぶ。
3. 先人たちの教えを**多くの人に広める**。

【具体的な学習内容】

- ①オリエンテーション(「インド洋大津波」に学ぶ)
- ②地震の体感(起震車体験)
- ③調査学習(フィールドワーク)
- ④津波の体感(高さ、速さ)
- ⑤学習のまとめ(調査学習のまとめ、構成詩の作成、文化祭での学習発表、自主制作ビデオ「てんでんこ」)

①津波を体感する

学区で最も高い津波の記録
13mを校舎使って、下から
眺める。

津波の速度(沿岸部)時速36kmで走る
車と、様々な方法(ケガした友達を背負
う・リヤカー)で走って競争してみる。



高さ



速さ



揺れ

②調査学習(フィールドワーク)



- ・**地域**に残されている津波記念碑などの史跡調査。
- ・チリ津波などの体験談の取材。
- ・郷土資料館で、これまでの津波の歴史と被害の様子を取材。等



③自主制作ビデオ「てんでんこ」



- ・これまで学習してきたことの中から、**多くの人に伝えたい**ことをビデオにしました。
- ・「**祖父や祖母たちが、玄関のくつをそろえておくように**という意味が分かった。」

- ・地域で学んだことを地域の多くの方に伝える。



Ⅱ 震災後の取組 ～「いわての復興教育」の取組を事例に～



震災の経験を子ども達がどう受け止め、
これからどう生きていくべきなのか？



震災・津波を乗り越え、未来を創造していくため
に、10年後、20年後の岩手県を支えていける
子どもたちの育成を目指す。

そのために

各学校でふさわしい復興教育に取り組む
震災・津波に伴う経験は
それぞれ貴重な教育的価値をもっている

- ・新しい防災教育
- ・体験(教訓)から学ぶ教育活動

被害の多寡によらず、**県内全ての子ども一人一人**が震災津波と向き合い、
自分自身を見つめ、他者や社会とのかかわりを考えることが重要

「いわての復興教育」プログラム【改訂版】



「いわての復興教育」とは？

- ①「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値（【いきる】【かかわる】【そなえる】）を育てること」です。



「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 ■ 06



「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

ポイント 1 【目的】

「いわての復興教育」の目的を整理しました。

【震災前からの目的】

「知・徳・体」を備え調和のとれた人間形成

「ひとづくり」

補完・充実

【「いわての復興教育」の目的】

郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成

「復興・発展を支える
ひとづくり」

【根底】

震災津波を乗り越えて、未来を創造していくために、
10年後、20年後の岩手の復興・発展を担う子どもを育成すること。



「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

ポイント 2 【教育的価値】

震災津波の体験からクローズアップされた教育的価値を明らかにしました。

震災津波の経験を後世へ語り継ぎ、自ら在り方を考え、
未来志向の社会をつくることが必要

震災津波の体験からクローズアップされた
教育的価値を3つに分類し、テーマを付ける。

- 1 生命や心について【いきる】
- 2 人や地域について【かかわる】
- 3 防災や安全について【そなえる】



「いわての復興教育」の教育的価値

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 ■ 08



「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

3

【教育的価値一覧表】

3つの教育的価値と具体の21項目からなる教育的価値一覧表を作成しました。

「いわての復興教育」における3つの教育的価値と具体の21項目

教育的価値一覧表

3つの教育的価値	具体の21項目
1 生命や心について【いきる】 震災津波の経験を踏まえた 生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①～⑦
2 人や地域について【かかわる】 震災津波の経験を踏まえた 人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画	⑧～⑭
3 防災や安全について【そなえる】 震災津波の経験を踏まえた 自然災害の理解・防災や安全	⑮～㉑

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 ■ 08

3つの教育的価値	具体の21項目
 1 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ心のあり方心身の健康 	①【かけがえのない生命】 全ての生命は、かけがえのないものであることを実感し、大切にする。 ②【自然との共存】 自然の恵みや美しさに感動する心と畏敬の念をもち、自然と共に生きることに ついて考える。 ③【価値ある自分】 どのような状況においても、自分の存在を認め、必要とされる存在であることを認識する。 ④【夢や希望の大切さ】 夢や希望をもつことは、生きる価値を見出すことであり、つらく厳しい状況を乗り越えられることにつながることを実感する。 ⑤【やり抜く強さ】 救援活動などに従事した人々の働きと苦労を通して、どんな状況においてもやり抜く強さについて考える。 ⑥【心の健康】 つらいことや悲しいこと、環境からくるストレスなどを感じた時の対処方法を学び、自分自身で心の健康を維持する。 ⑦【体の健康】 周囲の環境を理解し、状況に合わせながら安全に気をつけて遊んだり、運動したりする。

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 ■ 09

3つの教育的価値	具体の21項目
 仮設住宅の方々に植え方の指導をいただきながら、楽しく花苗植えをしました！	⑧【家族のきずな】 安心して生きていくための生活基盤として、家族の絆や家族の一員としての喜びを実感する。 ⑨【仲間や地域の人々とのつながり】 幼児や高齢の人々・障がいのある人々等と一緒に生活している地域社会において、互いに支え合う仲間の大切さや地域の方々のありがたさを実感する。 ⑩【県内外や海外の人々とのつながり】 苦しみや悲しみに包まれている人々を支援している人に感謝し、共に協力することの大切さを実感する。
2 「かかわる」 震災津波の経験を踏まえた 人の絆の大切さ 地域づくり 社会参画	⑪【ボランティア】 他の人や地域社会に役立つことを自分から進んで実践し、他人の喜びを自分の喜びとして共感する。 ⑫【自分と地域社会】 自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と地域社会との関係について考える。
	⑬【地域づくり】 郷土の美しい自然、伝統行事・郷土芸能、温かい人のつながりのある社会、安全なまちを願い、地域づくりにかかわる。 ⑭【復旧・復興へのあゆみ】 震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧・復興の状況を調べ、安全で生き生きしたまちづくりにかかわる。

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 ■ 09

3つの教育的価値

具体の21項目



3 【そなえる】

震災津波の経験を
踏まえた
自然災害の理解
防災や安全



⑮【東日本大震災津波の様子と被害の状況】

平成23年3月11日に発生した、東日本大震災津波の様子と被害の状況について理解する。

⑯【自然災害発生のメカニズム】

自然災害が発生するメカニズムやそれぞれの災害について理解する。

⑰【自然災害の歴史】

過去に起きた自然災害や自然災害と共存してきた人々の努力や工夫などについて調べ、防災・減災について理解するとともに、次の世代へ語り継いでいく。

⑱【自然災害のライフラインへの影響】

震災津波の被害による教訓をもとに、水、電気、ガス、灯油、ガソリン、道路などの供給・輸送システムやその大切さを理解し、ライフラインが止まったときに対応できるようにする。

⑲【災害時における情報の収集・活用・伝達】

震災津波の被害による教訓をもとに、情報の大切さ、情報の収集、選択・判断、発信の方法などについて理解し、活用できるようにする。

⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】

避難場所や避難方法、避難経路を把握して、安全に避難する。家具の安全対策、避難の方法や落ち合う場所、非常時持ち出し品、放射線についての正しい理解など、学校や家庭でできる防災対策を行う。地域の防災システムを理解し、防災活動に参加する。

㉑【身を守り、生き抜くための技能】

危機を予測(回避)し、災害や事故に直面した際に自他の体を守り、被害を最小限に止め、非常時に生き抜く技能を身に付ける。(応急手当や心肺蘇生法、食中毒防止、衣食住に関すること、放射線対策等)

11月5日は
津波防災の日

いわての復興教育副読本 『いきる かかわる そなえる』

※3つの教育的価値と具体の21項目に対応



小学校・低学年用



小学校・高学年用



中学校用

副読本の構成

【基本】

- 3. 11を忘れさせないため、風化させないための教材。
- 子どもたちの発達段階や学習状況等に対応した教材。
- 「いわての復興教育」プログラム【改訂版】に連動。
- 3つの教育的価値と具体の21項目に対応。

【いきる】

具体の21項目の①～⑦に対応した教材をアトラダムに掲載。

【かかわる】

具体の21項目の⑧～⑭に対応した教材をアトラダムに掲載。

【そなえる】

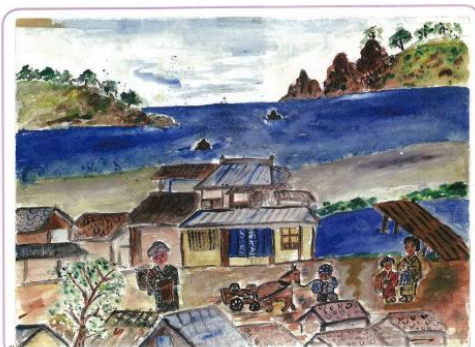
具体の21項目の⑮～㉑に対応した教材を系統的に掲載。

1「震災津波の被害の様子と歴史」→2「自然のメカニズムと被害の特徴」→3「危険予測と判断や行動・訓練」→4「状況に応じた対応」→5「社会への影響・家庭での備え・地域での取り組み」

副読本の内容(小中学校)【いきる】②自然との共存

しぜんといきる 小学校・低学年【いきる②】

しぜんとともに



宮古市田老地区の田畑ヨシさんは、1925(大正14)年の生まれです。田畑さんが子どものころの田老は、青い青い海と、どこまでもつづく白いすなはまのある、美しいところでした。

田畑さんのおじいさんは、1896(明治29)年の明治三陸地震の津波を見ることがありました。このときは約15メートルの高さの津波がおし寄せ、田老地区で生きのこった人は37人しかいませんでした。

田畑さんも8才のとき、津波のおそろしさを知りました。1933(昭和8)年の昭和三陸地震による津波は、高さ約10メートル。田畑さんはまっ暗やみの中をはだして裏山にげました。朝になると、家はみんな流されていて、多くの人がけがをしていました。

海人の心 小学校・高学年【いきる②】

海人の心

「海はきらいだ。」と書かれたペンキを見て、ひろしも、海なんか大ききらいだと心の中でさげんでいた。

東日本大震災大津波で、沿岸部は大きな被害を受け、沿岸漁業は壊滅的な状況になった。船が流され、養殖の施設も跡形もなく流された。

小学校4年生のひろしの家は、小さな漁港にあり、高台にある自宅の他に、港のそばに、海産物を塩で仕上げたり、乾燥させたり、ふくろづめしたりする作業小屋があった。港には、家計を支える大事な原動力である船が4艘あった。

大津波は、ひろしの自宅を壊して、すべてを飲み込んだ。それからしばらくして、ひろしは家族で街に買い物に出た。街のいたる所で修復や掃除が行われていた。ある建物の大きく青いペンキで「海はきらいだ。」と書かれていた。ひろしの中で、その言葉が大きくなり、心がびくびくと脈打つようにふるえた。「うーん……。そうだ、ぼくも海はきらいだ。たくさんの命をうばった海、たくさん船を……。作業小屋をうばっていった海なんか……。海なんか……。大ききらいだ……。思わず、ひろしは顔を真っ赤にして、心の中でさげんでいた。

震災からほぼ1年後、お父さんは役所の努力や漁業協同組合のお世話あって、船や漁で使う道具のほぼ一式をそろえることができた。その時のお父さんとおじいさんのうれしそうな顔は、なんと言ってもいいが、青空のようにすっきりしていた。その晩、家族みんなで赤飯を食べた。地域にもやっと明るい活気がもどってきたようで、交わすあいさつにも元気が出てきた。5月、船を得たたくさんの漁師さんたちが集まって、その年の豊漁を祝い、神にある神社で神事を行った。白装束の神主が祝詞をあげ、続いて神楽が奉納され、恵比寿様の面をつけた舞が1時間近くも続いた。ひろしはおじいさんに「何をおどっているの？」と聞いた。



森の防潮堤で命を守る 中学校【いきる②】

森の防潮堤で命を守る — 森の長城プロジェクト

生きた証である瓦礫で盛土を築き、植樹して森の防潮堤をつくり、津波の被害を防ごうとする「森の長城プロジェクト」が、2012(平成24)年から始まっています。

東日本大震災では、多くの人々、家屋や建物が津波に襲われ、大きな被害を出しました。津波の威力を抑え、被害を最小にする対策が早急に必要です。そこで始まったのが、震災で出た瓦礫を埋めて盛土を築き、その上にその土地本来の樹木を植えて森にしようというプロジェクトです。



300kmの沿岸に9,000万本の木を植える

このプロジェクトは、岩手県から福島県までの沿岸300kmに、10年間かけて9,000万本の植樹をし、森をつくらうというものです。植樹は、震災によって出た大量の瓦礫を埋めて築いた盛土の上に行います。瓦礫を再利用することで、震災を後世に伝えていこうという目的があります。また、瓦礫と土を混ぜることにより空気の層ができて酸素がいきわたりやすく、木々の成長にもよいのです。しかも瓦礫を抱くように根を張ることでしっかりと木が育ちます。木々は1年に約1メートルずつ伸び、やがては森になっていきます。

いのちを守る森のしくみ



小学校・低学年

〔家族で学ぶ 地震防災 はじめの一歩〕大木望子著(株)東宝堂出版より)

ショート訓練をやってみよう

(添削) 慶應義塾大学 大木昭子准教授と研究室メンバー

(出演：劇団飛騨士道 太田陽子准教授と研究家メンバー)

小学校・低学年

ひなんするところ。そなえておくものなどをかくにんしておきましょう。

ひなん場所や集合場所をかくにんしよう

さいがいによって、もしはなればなれになったときに、どこにひきこもるか、場所を定めておきましょう。東陽ふんが、かならずそこに行くこと、やくそくしておくといっていました。

家庭にそなえておくもののチェック

身の安全を守るためにびつようなもの、水通し・電熱・ガスを使えなくても毎日関係するのびるためにびつようなものを覚えておきましょう。それがそろっているかどうか、家計でチェックしましょう。

おうち防災マップをつくろう

家族が家族のいるところにたおれてこないか、出入り口をふさがないで、ギョウギする
ひつようがあります。そのために、おうち防災マップをつくって、家族で点検しましょう。

● おうちぼうさいマッパのつくり方 ●

- ④ リンダやアーナル、車庫の前面や台所の後部、お風呂、トイレなどは、丈夫の材でできたり、清潔に仕立てられる。

（1）實證了學說（論斷）是社會的——名，社會的性質，隨着社會的變遷而變遷。

かんがえてみよう・しらべてみよう

- あなたの家では、地震が起きたときにどのようなやくそくをしていますか。
- 家の中にきけんなところはないか、調べてみましょう。
- あなたの家でそなえているものに不足がないかどうか、調べてみましょう。

小学校・高学年

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災からひと月がたないころ、宮古市立兼ヶ崎小学校では、児童たちが自分たちの思いを託している「語り始め」が始まりました。また、地域の方たちからも「語り伝えていく責任がある」「記録に残してほしい」という意見が出されました。そこで、兼ヶ崎小学校の3年生からは、地域の方たちから3月11日の津波体験に関してインタビューし、記録に残すことを決めました。地域の方23名にインタビュー。その結果を考察した児童たちは、兼ヶ崎の未来のために、次の「下つきの授業」をしました。

豊ケ崎小学校5年児童
五つの提言

東京府中の資源を参考に、
自治体別の地域にふさわし
い資源を調べてみましょう。

■ 1 地震が来たら 迷わず高台へ にげるべし

まず、近くの自治体に知らせることが大事です。津波がおきたら、避難所へ移動し、名前を登録しましょう。名前を登録すると、強い場所を中心に配している人にも、災害を知らせることが出来ます。

目標2 命を優先し、何があっても もどらぬべし

津波は、第一波、第二波、第三波と何度も押し寄せます。大事な物を取りに家にもどらないことが、命を守るために大切なことです。

図表 3 助け合い 人とのつながりを 大切にするべし

ふだんから、いっしょに遊園訓練をしたり、地味の方と交流していると、みんなで食事をしようとする気持ちが高まることを知りました。

注意 4 万一に備え 防災グッズを 準備しておくべし

前もって防災グッズを準備し、地震が来たら、すぐに持ってにげましょう。防災グッズのなかは家族と話し合いながら決めておきましょう。

問題 5 実数に向けて 一歩一歩 進むべし

みんなが、すぐ認識できるよう、工夫で同じ・違物を表したり、歌でもにげることができるよう、大きな道徳をつくることが必要です。何年かかるかわからないけれど、みんなが心算をせしめ、いっしょがかりして集まる道徳教室にしていきたいです。

副読本の内容(中学校)【かかわる】【そなえる】

そのとき、どうする？

中学校

そのとき、どうする？

災害時に適切な行動をするためには、もし災害にあったときにどのようにすればよいかを、みだんから考えておくことが大切です。
それでは、次のような場合、どのような危険が考えられますか。また、身を守るためには、どのような行動をしたらよいのでしょうか。
みんなで考えてみましょう。

① 学校で地震にあったら…？

音楽室でみんなが合唱の練習をしていた。そのとき、カダカダと揺れ始めた。



さあ、どうしたらよいでしょうか。

地域を知る

中学校

地域のハザードを知ろう

災害が起こったときに被害が起ころうなところや避難するところをしるした防災マップは、災害発生時の被害をなくす、あるいは少なくするために大切なものです。この防災マップづくりを通して災害图上訓練(DIG)を行うと、さらに防災力が高まります。

① 災害图上訓練(DIG)とは？

Disaster(災害)、Imagination(想像)、Game(ゲーム)を略してDIG(ディグ)といい、地図を使って、災害を知る、まちを知る、人を知ることを通して訓練するものです。DIGはテーマにより、準備するものも、進め方もいろいろですが、ここではごく基本的なことを記します。

② 準備するもの

- ・地図 ・透明シート(地図の上にはって書き込む) ・テープ ・カラーペン
- ・カラーシール ・ふせん など

③ 作業内容

- 1：道路や川など自然条件を書き込む。
- 2：警察署、消防署、学校、公園など防災資源を書き込む。
- 3：地域で起こりそうな被害を書き込む。
- 4：作成した地図をもとに、地域の特徴、被害の概要、防災のための対策などを話し合う。

災害時の情報と心理

中学校

災害時の情報と心理

災害が起こると、「何が起きたのか」「どこに逃げればいいのか」「家族はだいじょうぶだろうか」と、いろいろなことを知りたくなります。でも多くの場合、電話はつながらず、停電でテレビも見られません。「情報」の収集・伝達は重要な問題です。

情報を得る

災害が発生した場合には、正確な情報が伝達されます。津波が来るのに、知らなければ逃げようがありません。

通常、地震や津波が来る場合はテレビ、ラジオ、地域の防災無線などで速報や警報がなされます。しかし、巨大地震が発生した東日本大震災の時には、停電でテレビが見られない、夜所が機能せず放送できないなどいろいろな問題がありました。逆に、携帯電話で使えるラジオ、携帯のツイッターなどが情報源として役立つという話もよく聞かれます。

正確な情報を得るにはどうしたらよいかを考え、みだんから情報の入手先や入手方法を確認しておく必要があります。



(出典：復興庁政策課)

的確に判断する

注意報や警報が発令されたにもかかわらず、避難しなかったり、避難が遅れたという例が各地にあります。素人に関する情報を得ても、的確に判断し、行動できないと何の意味もありません。的確に判断し、行動するためには、入手した情報がどのような意味を持つのか、防災の知識を身に付け、訓練などに積極的に従うことが重要です。

また情報は、マスコミや公的機関のものだけではなく、地震の揺れ、天気の変化なども重要な情報です。

そして、自分の身を守るためには、例えば避難所や津波注意報や警報が出なくても、地震の強い揺れを感じたり、長い時間ゆっくり揺れた場合には、自分で判断して避難することが必要となります。

自らかかわる

中学校

できますゼッケン

「高齢者の介護」「手話」「ヘアカット」「トイレ掃除」！
この人たちは、なんの大会？ なんでゼッケン、つけているの？



実は、この人たちはボランティアです。つけているのは「できますゼッケン」といいます。このゼッケンは神戸市で生まれました。考案した人は、このように説明しています。
「16年前、私たち神戸市民は、大きな震災を経験しました。つらく、心細く、終わることがないように思えた長い避難生活。あの日々の教訓を今後に生かすためのプロジェクト「issue + design」で生まれたのがこの「できますゼッケン」です。」

4つの色で分野を示す

「困っている人たちのために力になりたい。」

この一心で集まってくるボランティアの人々。

しかし、災害現場ではそのボランティアがだれで、その人はどんなことができるのか、といったことがなかなかわかりません。専門的な技術を持っている人を単純な力仕事に使ったり、料理の得意な人を炊き出しに使えなかったり、というようなことが起こります。

「できますゼッケン」は、例えば「医療・介護」(赤色)、英語



故郷を愛し、その復興・発展を支える「人づくり」
～安心で安全な社会を築いていく～

いきる

そなえる

かかわる



「1000年後まで伝えよう！
東日本大震災のこと」
(大船渡市立吉浜中学校)



「被災地のためにできること」
(花巻市立花巻北中学校)



「自分たちで考える防災」
「地域と連携した避難訓練」
(大船渡市立越喜来小学校)



「宮城・内陸地震を風化させない!」
(一関市立本寺小学校)



「地域とともに総合防災訓練」
(滝沢市立滝沢第二中学校)